

夢を応援基金 ～東日本大震災奨学金制度～ 2017年度 活動報告



自分たちの被災経験を参加者同士で共有しながら活動した
熊本ボランティアプログラム

制度概要

名称	「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」
奨学金	月額30,000円(給付、返還不要)
奨学生	1,097名（2011年9月奨学金給付開始時の人数）
目的	本奨学金は、2011年3月11日に発生した東日本大震災(以下「本震災」という。)によって経済状況が急変、または悪化し、就学継続が困難な状況にある、日本国内の高等学校及び高等専門学校(1～3年)、並びに高等専修学校に在籍する生徒に対し、大学など上級学校卒業までの間、奨学金を給付することにより、経済的不安を緩和し、学習効果を高めることを目的として寄与するものです。
運営体制	創設者：株式会社ローソン 運営主体：公益社団法人Civic Force 基金事務局（奨学生等との窓口業務）：特定非営利活動法人チャリティ・プラットフォーム *この事業は、Civic Forceの「中長期復興支援事業」の一環として運営されています。また、奨学金を含む運営のための資金は、ローソンによる店頭募金やマルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」で受け付けられた募金、Pontaポイント・dポイントでの募金のほか、Civic Forceオンライン寄付などで受け付けられた寄付により賄われています。
支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 月額3万円の奨学金給付(返還不要) ■ 教育プログラム（ボランティア活動、奨学生交流会など）の実施によるサポート ■ その他被災地の生徒や学校からの意見も取り入れ、現地のニーズに合わせた様々なサポートプログラムを実施予定
対象者 *募集当時	高校進学を控えた中学3年生（予約奨学生）、高等学校、高等専門学校（1～3年）等に在籍していた生徒
応募資格 *募集当時	<p>下記(■)の条件をすべて満たし、かつ、AまたはBのいずれかに該当すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本震災時に家計を支える方が岩手県・宮城県・福島県に居住しており、同地域の学校に通学していた生徒 ■ 学校の推薦を受けることができる品行方正な生徒 ■ 夢をかなえるために、意欲と根性があり、東北の復興への貢献を希望している生徒 <p>=====</p> <p>A.本震災により家計を支える方が死亡・行方不明・負傷病気・失業等の被害を受け、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p> <p>B.本震災により居住していた住宅が半壊・半焼または床上浸水以上程度の被害を受け、または計画的避難区域になっているなど、経済的事由により就学が困難な状況が見込まれる生徒</p>
支給期間	2011年9月より高校・高等専修学校卒業または専門学校・大学などの上級学校(大学院除く)卒業までの最大7年間 ※2011年度は、2011年9月から2012年3月までの7カ月間。以降、毎年進学時に更新手続き有り
注意事項	受給者は、奨学金の返還義務を負いません。また、奨学金の主たる提供者(株式会社ローソン等)への入社等その他の付帯義務を負うものではありません。 ※2018年3月現在、奨学生は募集しておりません。

「夢を応援基金」運営協力企業

教育新聞

The Education Newspaper

株式会社教育新聞社
運営のための様々なご協力をいただいております

Bridge For Smile

認定特定非営利活動法人ブリッジフォースマイル
運営のための様々なご協力をいただいております

77 BANK 七十七銀行

株式会社七十七銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております

すべてを地域のために
東邦銀行

株式会社東邦銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております

岩手銀行

株式会社岩手銀行
奨学金等の振込に関する手数料の一部を免除いただいております

第7期活動概要

2011年3月11日の東日本大震災発生から半年後の2011年10月、株式会社ローソン（以下、ローソン）からのお申し出により立ち上げられた「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」（以下「本基金」という。）より、第1回目の奨学金が奨学生1,097名に支給されました。本基金では、2,400名の応募の中から選ばれた1,097名の被災学生に対し、高校入学から大学を卒業するまでの最長7年間、奨学金を支給します。

第1回目の奨学金支給開始から約6年半――2017年4月、6回目となる更新手続きでは、117名の子どもたちが高校や上級学校（大学、短期大学、専門学校等）を就職等で奨学金を終了し、社会に羽ばたいていきました。2017年度は上級学校に進学した4名を含め、193名の奨学生に奨学金を支給しました。1年間の奨学金支給を経て、2018年3月、本基金は皆様のご支援のおかげで、無事、第7期を終了することができました。

基金の創設者であるローソン、そしてローソングループの店頭募金にてご協力をくださった多くの皆様、オンライン寄付によりご寄付をいただいた個人の皆様に、活動のご報告と併せまして、心より御礼を申し上げます。

夢を応援基金の主な活動

年	月	活動内容
2018年	4月	2018年度更新手続きを実施
2017年	8-9月	熊本県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2017年度更新手続きを実施
	1-3月	図書進呈プログラムを実施
2016年	8月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2016年度更新手続きを実施
	3月	■全国のローソングループ各店で店頭募金を実施（一か月間） ■「夢を応援フォトコンテスト2016」を実施
	2月	仙台で開催された復興応援イベント「LAWSON Presents ドリームトークショー & クロストークディスカッション+ライブ」に奨学生が参加
2015年	8-9月	宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2015年度更新手続きを実施
	2月	ローソン店頭マルチメディア情報端末「Loppi(ロッピー)」を通じた募金の受付を開始
2014年	7-8月	7月、岩手県で奨学生交流会を実施。8月、宮城県で奨学生交流会と夏の体験プログラムを実施
	4月	2014年度更新手続きを実施
2013年	11月	仙台で奨学生交流会を実施
	8月	東京で奨学生交流会を、宮城県で夏の体験プログラムを実施
	4月	2013年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	■本基金の運営主体が公益社団法人Civic Force（シビックフォース）に移行 ■全国のローソンで、募金告知のため『1,097のありがとう。』（小冊子）を配布 ■全国のローソングループ各店で店頭募金実施（～5月末）
	1月	奨学生のうち、高校2年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布
2012年	5月	予約奨学生（申込時に中学3年生で、新高校1年生）への奨学金支給開始
	4月	2012年度奨学生の更新手続きを実施
	3月	■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～5月末） ■奨学生のうち、高校2年生及び高校3年生を対象に、自立支援ハンドブックを配布 ■基金奨学生募集時に、申請書を提出した学生が在籍する高等学校及び高等専門学校に対し、自立支援ハンドブックを寄贈
	2月	ローソン主催による、被災3県の高校生を応援する「スペシャル講演&ライブ2012」を仙台市で開催。約700名が参加
2011年	12月	ローソングループ社内募金の受付開始（給与天引き制度）
	11月	旺文社様からのご寄付と寄贈により、奨学生募集時に申請書を提出した学生が在籍する高等学校、高等専門学校、中学校全358校に対し、『それでもいまは、真っ白な帆を上げよう』を2冊ずつ寄贈（合計716冊）
	10月	■第1回目の奨学金を支給 ■奨学生とならなかった生徒には、支援金3万円とローソンプリペイドカード6千円分を進呈
	9月	1,097名の奨学生が決定（応募総数2,400名）
	7月	被災地（岩手県、宮城県、福島県）の高等学校、高等専門学校、中学校等に奨学生の募集を告知し、奨学生を募集
	5月	■全国のローソン各店で店頭募金を実施（～8月） ■ローソン各店舗にて、寄付つき商品の販売を開始（その後随時実施）
	4月	「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」創設
	3月	東日本大震災発生

卒業生からのメッセージ-1

2018年春、89名の奨学生が夢に向かって羽ばたきました。
寄付をいただいた皆さまへ御礼のメッセージが届いています。

「学校が唯一心安らく場所」一宮城県出身

私は高校1年生の時に東日本大震災を経験しました。東京電力福島第一原発事故の影響もあり長い間実家に帰れないため、避難生活、仮設住宅生活というこれまで経験したことのないような生活が続きました。そんな中唯一心が安らく場所が学校でした。友達と授業を受け、他愛もない会話をする、その場所が自分にとってとても楽しい時間であったと思います。私が高校、大学に通うことができたのも夢を応援基金があったおかげです。本当にありがとうございました。

「今度は私が誰かの支えに」一岩手県出身

震災後、一度は看護師の資格を取ることを諦めようか悩んだ時期がありました。しかし、夢を応援基金から支援していただけるとわかった時、支援してくださっている多くの方々の思いを胸に、看護の学びに励むことを決めました。そして大学卒業までの長い期間、支援していただけたことに心から感謝しています。社会に出たら今度は私自身が多くの方の支えとなれるような存在になり、社会に貢献したいと思います。本当にありがとうございました。

「心に悩みを抱えた人を支えたい」一福島県出身

私は震災で父を亡くし、義務教育を終えていない子ども3人を抱えた母が残りました。それでも私は大学生生活の4年間を終え、この度卒業に至ります。大学生活は、勉強・友人との付き合い・アルバイトなど、とても充実したものでした。このように色濃い生活を送ることができたのは、皆さまのご支援があったおかげであると感じています。私は、今後、心に悩みを抱えた方を支援していきたいと考えています。私がこの奨学金のおかげで自分らしい生活を送れたように、作業療法士として患者さまにも心身ともに不自由の少ないその人らしい生活を送っていただけるように努めていきたいと思っています。皆さまのご支援に感謝いたします。



「親孝行をしたい」一宮城県出身

長きにわたり、本当にありがとうございました。母子家庭で、また被災もし、中学卒業以降の将来が不安で仕方ありませんでしたが、毎月のご支援により、心身ともに充実した生活を送ることができました。奨学金を受けさせていただくことが決まった際には、高校の事務職員の方に「親孝行だね」と言葉をかけていただきました。それまで親孝行を意識しなかった私も、それからは親孝行を意識し、震災後も震災前と変わらぬ生活が続けられることに感謝しています。何かとお金のかかる就職活動も、バイトと両立することで全力を尽くすことができました。今後は、この7年間の成長を、家族に、そして世の中にお返ししていきたいと思っています。ありがとうございました。

「諦めなければ前に進める」一岩手県出身

東日本大震災から7年が経ちました。大震災で、自宅や両親の職場も全壊・流失の被害を受け、先が見えない中でも、この夢を応援基金のおかげで、自分の将来を考え、夢に向かって進むことができました。大学生活は勉強などとても大変でしたが、諦めなければ、努力すれば前へ進めるのだと感じています。試験に合格し働くようになったら、今まで私を支えてくれた方々のように、私も微力ながら、その応援ができればと思っています。ローソンの募金箱を見るたび心の励みになりました。今まで本当にありがとうございました。



「皆が安全・安心に暮らせるように」一宮城県出身

震災当時、大学進学はもちろん高校に無事に通えるかどうかでも不安でした。しかしながら、全国の支援者の皆さまのおかげで無事に高校、大学を卒業し、この春社会人になることができます。今後は建設関連の仕事につき、日々の安全や防災にも取り組みます。社会人としてはまだまだ未熟ですが、皆さまの温かいご支援、お気持ちをいつも胸に、全ての人々が安全、安心に暮らせるように一生懸命仕事に取り組みたいと思います。本当にありがとうございました。



卒業生からのメッセージ-2

「新しい夢が見つかった」－福島県出身

私は東日本大震災で家を失い、内陸に引っ越しました。高校では難病を患ってしまい、何度も心が折れそうになりました。しかし、諦めずに卒業まで頑張ったよかったです。

今年の夏にはやりたいことが見つかり、4月からは車の整備士になるために、働きながら勉強して資格を取るために努力したいと思います。

高校を卒業し、新しい夢が見つけれられたのも支援してくださった皆さまのおかげだと思います。本当にありがとうございました。



「地域に貢献できる人になりたい」－岩手県出身

東日本大震災で被災した当時は中学2年生だったため、翌年に高校受験を控えた重要な時期でした。避難所生活となり、廊下で受験勉強をしていたことを思い出します。そこでは見回りの方に励ましの声をかけていただいたことを覚えています。避難所では、普段の生活が当たり前ではなくなり、今までの暮らしがいかにもありがたいものだったかを感じました。当時は中学生だったこともあり、炊事などはしませんでした。小さな子のお世話や水汲みなど、自分なりにできることを探していました。

無事に第一志望の高校に入学し、美術部員として震災をテーマとした作品を制作しました。美術部員とフリーペーパー用の作品や地元の観光名所をモチーフとした大きなモザイク画にも挑戦しました。

大学では、法学部に入学し、法律の解釈や行政、政治などについて学んでいます。さらに、学説や判例を検討することもあります。ゼミナールでは、行政学という分野に所属し、分野を超えて広く学習をしています。また地域政策を学び、中心市街地の活性化に興味を持ち、資料や文献を読むなど自分なりに勉強しながら知識を深めています。

今後はこれらの知識で地域に貢献できるような人材となり、活躍したいと考えています。本当にありがとうございました。

「共に復興の道へ」－岩手県出身

私は高校入学時、介護福祉士を目指していましたが、東日本大震災で被災し、その時に活躍する看護師の姿に感銘を受け看護という道を強く志すようになりました。しかし進学するにあたり、学費や生活費といった経済面での負担は大きく、両親にも迷惑をかけてしまうと思い、進学は諦めなければならぬと思っていました。そんな時にこの奨学金があることを知りました。

高校3年間、そして大学4年間、多大なるご支援をいただき、授業、看護実習、サークル活動などとても充実した、有意義な時間を過ごすことができました。心より感謝いたします。大学入学から、看護師国家試験、保健師国家試験、そして卒業とあつという間の4年間でした。無事国家試験に合格することができ、4月から看護師として頑張っていきたいと思っています。さらに、今後の看護に求められるより専門的な知識や高度な技術の習得に向け、日々努力を怠ることなく精進していきたいと思っています。

震災から7年が経ち、表面上は落ち着きを取り戻しているものの、被災者の生活状況は様々であり、今も不安を抱えながら生活している人がいます。そのため、長期にわたっての看護支援は不可欠です。1日も早く一人前の看護師として、地域医療に貢献し、被災者に寄り添い、共に復興への道を進んでいけたらと思っています。

「医療人として社会に貢献したい」－宮城県出身

高校1年生から計7年間支援していただき、大変感謝しております。高校の入試直前で震災の被害を受け、家の建て替えに多大な費用がかかったこともあり、大学入試自体を考えなければいけない状況でしたが、夢を応援基金のおかげで無事第一志望の大学に入学することができました。また、大学入試後、勉強や実習の関係でなかなかアルバイトができない状況が続いていましたが、高校からずっと支援していただいたおかげで、過度な心配をすることなく学業に専念することができ、今春、無事に卒業することができました。

夢を応援基金の名前におおきく、昔から抱いてきた夢を実現することができたのは、皆さまの応援のおかげです。本当にありがとうございました。4月から社会の一員として新たな生活を始めます。このご恩を忘れず医療人として社会に貢献していきたいと思っています。



サポートプログラム実施報告-1

「ありがとう」を伝えたい… 感謝のメッセージ動画

2018年3月、夢を応援プロジェクトサポートプログラムのひとつとして、奨学生から支援者の皆さまへ向けての感謝のメッセージ動画を作成し、公開しました。

「顔も知らない自分たちのことを応援してくださった方々に、自分たちの言葉で、自分たちの手書きの文字で感謝の気持ちを届けたい」。そんな奨学生の皆さんの声から生まれた企画です。

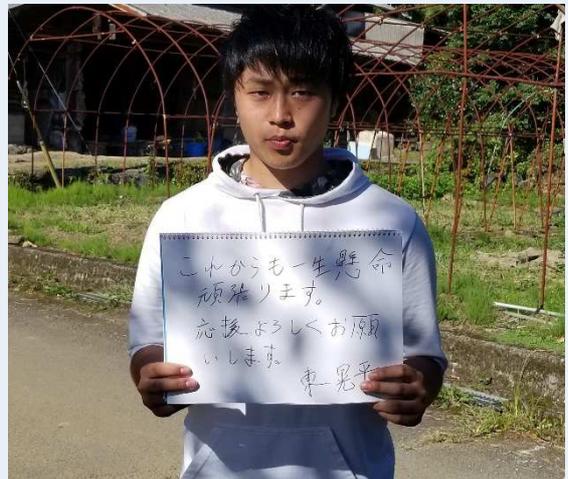
ある奨学生からは、「もしもこの奨学金がなかったら大学進学は無理だったかもしれないし、夢を諦めていたかもしれない。でも、奨学金をいただけたおかげで無事就職も決まりました。それに、こうやって自分と同じような環境の中で頑張っている仲間に出会えたことも嬉しく思います。実際に会って、互いのこれまでの経験や将来の夢を語り合ううちに、自分だけじゃない、みんな頑張っているんだからもっともっと頑張ろう、そんな気持ちになりました。全てこの奨学金制度のおかげです。感謝してもしきれないです」というメッセージが寄せられました。

また、直接自分の声で伝えたいと動画でメッセージを送ってくれた奨学生もいます。その中からいくつかご紹介いたします。



金野綾香さん（宮城県出身）

「これから健康に気をつけて頑張ります！ありがとうございます！！」



東 晃平さん（岩手県出身）

「これから一生懸命頑張ります。応援よろしくお願いします」



岡田 楓さん（岩手県出身）

「6年間ありがとう」



村上真聖さん（岩手県出身）

「ありがとうございます！これからも頑張ります！」

サポートプログラム実施報告-2

2017年8月～9月「ボランティアプログラムin熊本」を実施

2017年8月29日～9月4日、熊本県において、今年で5年目となる夏休みボランティアプログラムを実施しました。韓国から来た学生たちと共に熊本地震発災時の状況や、震災から1年以上が経過しての復興状況などを経験者の生々しい証言と共に学びました。また、熊本の観光地を取材し、日本だけでなく韓国や海外に向けて熊本の魅力をPRして観光客を呼び込むための取材活動をしました。熊本の経済復興を促すことが、今私たちにできる復興の手助けだと考えたからです。今回は宮城県出身の大学生4名、岩手県出身の大学生3名、計7名が参加。1週間にわたるプログラムの中で、韓国の学生たちとの親交も深めつつ、活動しました。



このプログラムでは、一般社団法人九州学び舎代表の長野良市氏より発災直後から現在に至るまでの南阿蘇の復興状況について、写真を使ってわかりやすく説明いただきました。また、東海大学の学生による講演では、その時現場で一体何が起こっていたのかを話していただき、それに対して参加者は現場をイメージしながら真剣に話を聞いていました。翌日は熊本県上益城郡山都町の復興、町興しに尽力する若手リーダーたちのお話を聞きました。都会から移住して有機農業を始めた方、地元で二百年余りも続く老舗酒造の方など、地元への愛にあふれ、伝統を守りながらも新しい何かに挑戦していく若手リーダーたちの話に、学生たちも感銘を受けていました。このプログラムでは九州北部豪雨の被災地でのボランティア活動も行いました。被災した家屋の泥出しや泥まみれになった食器を洗浄する作業など、炎天下のもと、汗だくになりながら一生懸命行いました。熊本復興の力になりたいと、学生たちは言葉の壁を乗り越えながら夜遅くまで話し合い、意見交換をするなど、有意義な1週間となりました。

プログラム参加者の声



「働くことに対する思いや考え方に感動」
木村朋広さん（宮城県出身）

たくさんの人たちのお話を聞いて、復興のためだけでなく、地元を盛り上げていくために働くことに対する思いや考え方を知ることができ、勉強になり視野が広がったと思いました。



「自分の目で見て耳で聞いて感じることに」
菊地丈一郎さん（宮城県出身）

現地視察や講演を通してニュースでは報道されない熊本の現状を見る事ができ、その被害の甚大さを改めて感じました。足を運んで自分の目で見て耳で聞いて感じる事の重要性を感じました。



「初めてのボランティア参加で…」
長岡沙羽さん（宮城県出身）

初めてボランティアに参加しました。プログラムを通して熊本の魅力や、災害の状況など、個人旅行では知り得ないことをたくさん学びました。

「みんなが知っておかなければ」
岡田 楓さん（岩手県出身）

地震を忘れないこと、発信されない事実があることは、みんなが知っておかなければならないことだと改めて感じました。

「同じ被災地でも全く違った」
金野綾香さん（宮城県出身）

同じ「被災地」と言われる場所でも、環境や土地柄で状況が全く違うことを実感しました。



地元の若手リーダーから有機農業についての説明を受け、感銘を受ける

「恩返しの思いで参加しました」
東 晃平さん（岩手県出身）

感謝と恩返しの思いで参加しました。熊本や福岡の現状、まだまだ復興には程遠い事実を痛感しました。

「故郷を大切にしたい」
村上真聖さん（岩手県出身）

故郷を大切にする地元の人との交流、韓国の学生と熊本の良い所を考える中で、逆に自分の出身地に目を向け、故郷を大切にしたいと思いました。

奨学生の2017年度の振り返り-1

2017年度を振り返り、「最も力を入れたこと」「成長した点」などをテーマに課題作文を書いてもらいました。ここに、その一部を紹介します。

【この1年間で最も力を入れたこと】

「障がい者への差別・偏見をなくすことの大切さを学んだ」—大学4年/宮城県出身・宮城県在住

この1年間で最も力を入れたことは、ボランティア活動とゼミです。主に障がい者福祉分野のボランティアではイベントのお手伝いや生活介護、高齢者福祉分野のボランティアではデイサービスや特別養護老人ホーム、訪問介護の活動に参加しました。障がい者福祉分野では様々な障がいを持つ利用者と職員からのアドバイスで「誠意をもって伝える」ということの重要性を学びました。高齢者福祉分野では、利用者から「あなたがいてくれてよかった」といった声をいただき、自分を必要としてくれる介護の分野にも魅力を感じました。ゼミではある社会福祉法人から依頼を受け、「障がい者の地域移行」について、グループホームの利用者を対象に質問調査を実施しました。質問項目を考えることから始め、調査を実施、その結果をまとめ、報告会を実施しました。この調査結果から施設とグループホームを比較しどちらの方がいいなどといった利用者さまからの直接的な声が聴けて良かったです。障がい者と地域の人々との交流を通して差別・偏見をなくすことの大切さを実感し、こういった今回の調査の取り組みを報告会などで社会に発信していく重要性を感じました。



【この1年間で最も印象に残っている出来事（嬉しかったこと・楽しかったこと）】

「演劇で子どもたちに感動を届けたい」—大学4年/宮城県出身・京都府在住

この1年間で最も印象に残っていることは、夏休みに行った名古屋の児童劇団でのインターンシップです。私は今まで、「舞台の仕事がしたい」「演劇をずっと続けていきたい」という想いで勉強を続けてきました。インターンに行った児童劇団は、私が小さい頃から入っているおやこ劇場に昔来てくれていた劇団で、私も何度か観劇したことがあります。インターンでは、劇団が所有している劇場での上演のお手伝いの他、実際に学校公演の現場に連れて行っていただきました。その中で一番印象に残った舞台は、劇団所有の劇場で上演された舞台です。LGBTを題材にしたお芝居で、対象年齢は4歳からとなっていました。最初そのことを聞いて、「子どもたちには難しいのではないか」と思いました。しかし、実際にその舞台を観て考えが覆されました。確かにLGBTを題材にしたものではありませんでしたが、物語のテーマは「一人ひとりの生き方の自由」でした。周りと違うと感じていることや、打ち明けられないことは誰にでもあると思います。それをマジョリティが正しいと決めつけず、一人ひとりの生き方として誇っていいのだということを教えてくれる、苦しくて優しい舞台でした。未就学児の子や小学生もたくさんいましたが、途中で騒ぎ出す子は一切おらず、皆真剣に受け止めているようでした。その後、出演者の方々とお話しした際に、「子どもには理解できないだろう」と決めつけて、説明的になってはいけません。自分たちは子どもの受け止める力、想像する力を信じて伝えている。というお話を聞いて、感動しました。そして、私もこの人たちと一緒に、子どもの力を信じ、子どもに大切なことを伝えていきたい、と思いました。



奨学生の2017年度の振り返り-2

【震災から7年を振り返って思うことや感じていること】

「忘れたくない、その気持ちを形に」—大学4年/宮城県出身・千葉県在住

私は去年の8月から、交換留学生としてアメリカのフロリダ州に留学しています。しかし前半の4ヶ月は友達づくりや海外の生活になれることに必死でした。そして後半に入り、徐々に生活に余裕が出てくると、日本にいた時にいつも感じていた被災者としての責任感や使命感を感じるようになりました。そこでいろいろなことに挑戦しました。まずは様々なインターンに応募しました。2月には地元南三陸町の団体が主催するロサンゼルスでの1週間研修に、通訳のインターン兼参加者として参加しました。研修には地元でNPOの代表として活躍する10人の女性が参加し、ロサンゼルスで様々な課題解決に挑む女性リーダーから団体の継続性やコミュニティー形成についてお話を聞きました。私の運営する被災地ツアー、Project“M”の活動に直接的に繋がる多くの学びを得ました。3月11日には日本語学校で、私の震災の体験と教訓について講話をさせていただきました。震災から時間が経つにつれて地元からどんどん離れてしまっています。しかし離れてみて、客観的に問題を見ることによって初めてわかることも多かったですし、復興に新しい風を吹かせるためにしっかり勉強しようというモチベーションにも繋がっています。また、7年も経つと記憶も薄れてきます。辛いから忘れたくないという人も多いですが、私にとって震災を忘れるということは大切な父や祖母、そして故郷を忘れることです。だからこそどこにいてもこうして語り続けるし、ツアーの活動も続けていきます。それが私の「忘れたくない」という気持ちが形になったものだから。



【来年度チャレンジしてみたいこと】

「南相馬の将来のために」—大学4年/福島県出身・北海道在住

私は来年度から酪農学園大学の4年生になります。実家の酪農業を継ぐ私には就職活動に割く時間があまり必要なく、授業も他学年より少なめです。なので、資格や免許の取得、そして卒業論文を頑張りたいと思います。資格や免許については時間の余裕のある時に、農業・酪農を営む上で必要になるものを積極的に取得したいと思います。具体的には農業簿記や危険物取り扱い免許、人工受精師や牽引運転免許などです。実家に帰った後に労働をしながら免許取得するのはかなり多忙になる恐れがあるので早いうちに取得し余裕をもって臨みたいです。卒業論文については南相馬市の復興関連の論文を書きたいと思っています。私が所属している研究室は「農村計画論」という研究室で、過疎化、高齢化する農村が地域再興するにはどうしたらよいか、農村が都市に与える影響などを学んでいます。この知識を活かして南相馬市が震災後どのように復興を進めてきたか、今後はどのように復興を進めるべきかを私なりに考察したいと思っています。現在の南相馬市には地域によってはまだ除染されていない農地、除染が終わっていても使用者がおらず荒れ果てている農地が多く見られます。また、農業者の多くが高齢者で担い手問題も抱えています。卒業論文を通して自分なりに南相馬の将来を考え、南相馬に戻ったときに一人の農業者として地域のためにこういった農地の使い方をすればよいかを考えていきたいです。また、南相馬の復興の現状を知ってもらうためにゼミのスタディーツアーと称して先生や学生を南相馬に招待する、ということにもチャレンジしてみたいです。大学生活も残り一年となり、本格的に自分の将来を考えるようになりました。悔いの残らないよう、目一杯がんばっていききたいと思います。



基金運営活動収支報告

「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」活動収支計算書 (2017年4月～2018年3月)

(単位：円)

昨年度からの繰越金	358,092,087
寄付金等収入	48,196,592
ローソングループ店頭募金	31,042,432
ローソン寄付つき商品等 *	3,328,764
ポイント募金（Pontaポイント・dポイント）	669,389
Loppi募金	1,345,500
ローソンお取引先	76,607
ローソングループ社内募金	11,733,900
その他収入	3,460
受取利息	3,460
収入合計	48,200,052
奨学金支出	68,640,000
奨学金（193名）	68,640,000
基金運営支出	10,083,889
基金運営管理費用	10,072,657
奨学金等振込手数料	11,232
支出合計	78,723,889
次期繰越金	327,568,250

*ローソン寄付つき商品等：ローソンオリジナル商品の売上金の一部等を寄付しています。

～寄付つき商品について～



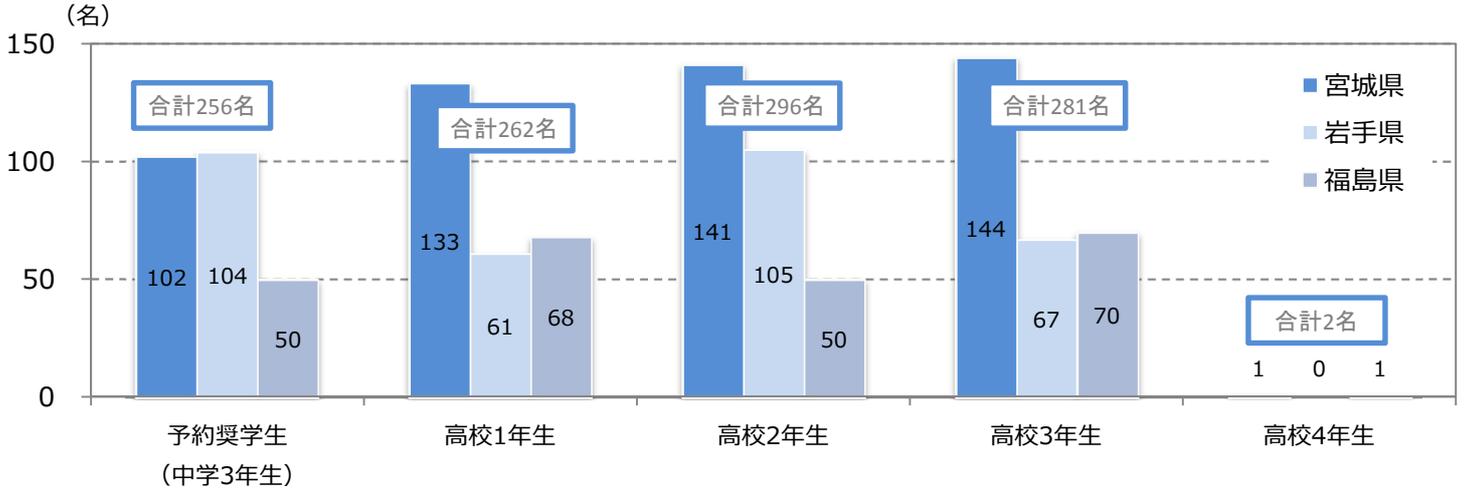
ローソンはお取引先様と連携し、売上金の一部を夢を応援基金に寄付する、寄付つき商品を随時販売しています。

写真左上は、宮城県産金華さばを使った「金華さばおにぎり」、写真右上は宮城県産『蔵王三十六景牛乳』を使用したホイップクリームとカスタードのダブルのクリームをシュー生地につまみ絞った『ホワイトエクレア（ダブルクリーム仕立て）蔵王三十六景牛乳使用』です。

そして写真下は三陸鉄道応援のため、三陸産の銀鮭や牡蠣・さんま・昆布を使った「三鉄応援！復興の内弁当」です。

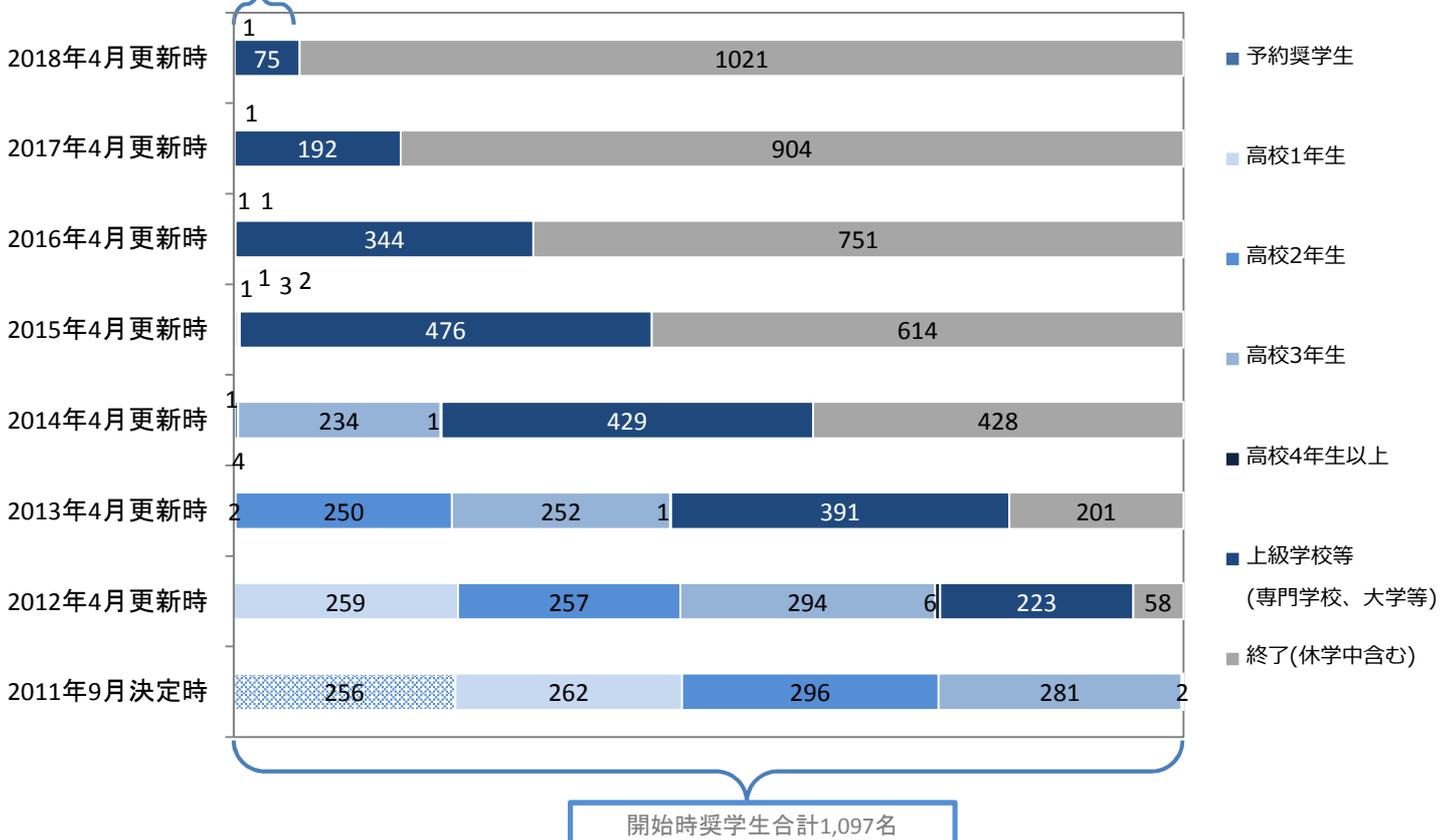
奨学生等の状況

奨学生決定数内訳 (合計1,097名。2011年9月末現在)



奨学生推移

2018年度奨学生合計76名



*各生徒数は、2012年4月の更新手続きにおいて、募集時の情報の訂正等があり、以前に公表されたものと数値が異なる場合があります。

上級学校等奨学生数内訳 (2018年4月更新時)

